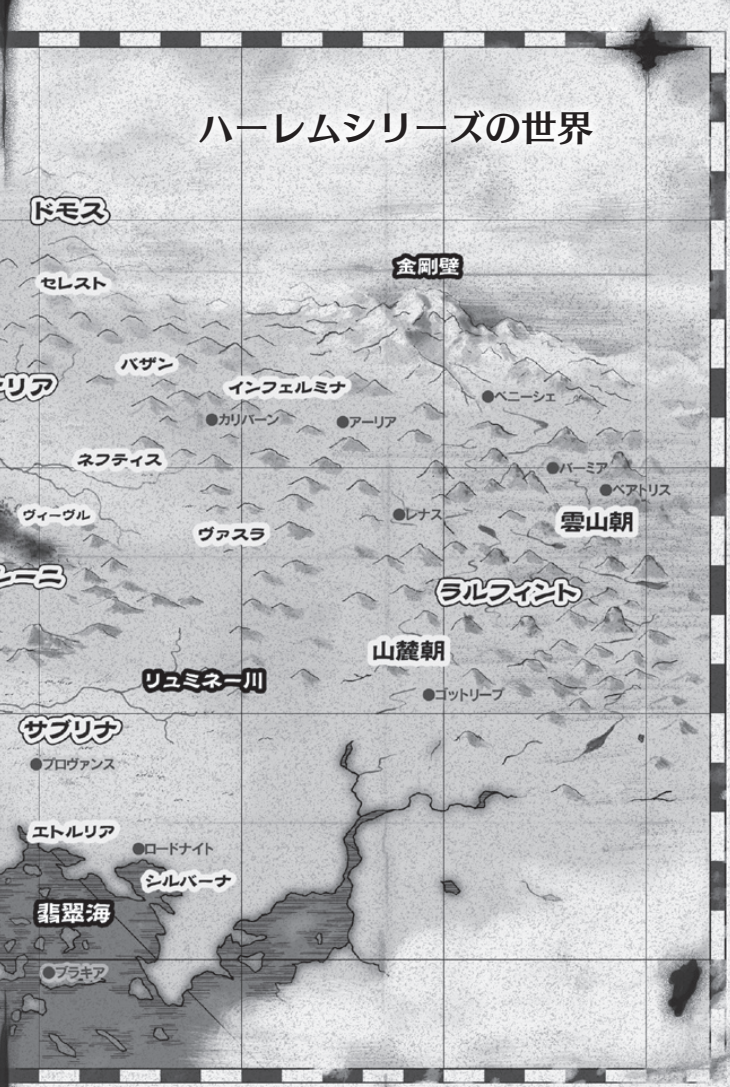
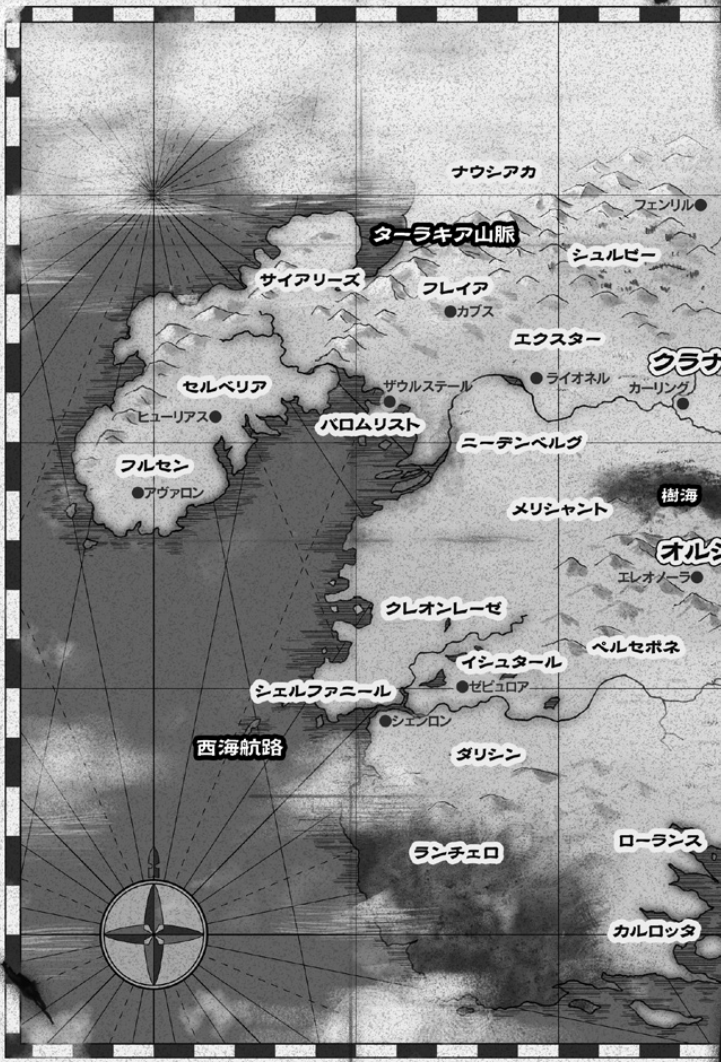
ハーレムジェネラル
THE REGEND OF HAREM GENERAL
立ち読み版
小説 竹内けん 挿絵 かん奈

ハーレムシリーズの世界



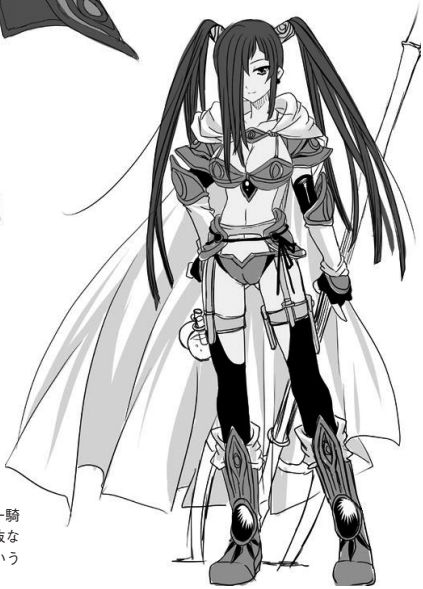

ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エクスター
クラナ
ライオネル
カーリング
セルベリア
ザウルステール
ヒューリアス
パロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
樹海
メリシャント
オルシ
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
ローランス
ランチェロ
カルロッタ

登場人物紹介

Characters

クリスティーナ

リュシアンが率いる部隊の戦目付で軍師役。将来を嘱望されるエリート将校。文武両道の真面目な娘。



ルキノ

下級兵士からの叩き上げで、一騎当千の強さを誇る女戦士。奇抜な髪型とセクシーなビキニ鎧といういでたち。

オルタンス

リュシアンの元先輩で、現在は副官を務めている。昔リュシアンとつき合っていたことがある。

マージョリー

フルセン王国によって祖国を滅ぼされ、フレイア王国に亡命してきた女武将。三十代半ばの大人の女性。

リュシアン

フレイア国王の甥というだけで将軍になった青年。女性が大好き。

第一章　王族将軍出陣す　009
第二章　激突！　女騎士　057
第三章　虚々実々　109
第四章　不死身の将軍　159
第五章　毒杯　213

「お、おちんちん……リュシアンくんのおちんちんちょうだい」
五年前にすっかり調教済みの女は、久しぶりに口にする隠語に頬を染めながらも、熱く懇願した。
このような美しい痴女を前にしては、いかに女慣れした貴人といえども操られずにはいられない。
「では、五年ぶりに先輩のオマ〇コの味を堪能させてもらいましょう」
ズボンの中からいきり立つ逸物を取り出したリュシアンは、その切っ先を牝の穴に添える。
しかし、すぐには入れない。亀頭部に女蜜を塗りたくる。
「ああ♪　もう焦らさないで、早く、早く、早く～♪」
もはや部屋に入ってきたときの、知的な女の面影はない。ただの痴女となったオルタンスは腰を後ろに突き出す。しかし、それに合わせてリュシアンも腰を引く。
「そうがっつかないでくださいよ。じっくりと楽しみましょう♪」
揶揄をしながらも、いきり立つ逸物の切っ先をゆっくりと押し込んでいく。
熱く蕩けた牝の肉襞が、貪るように肉棒に絡みついてきた。
「ああ……っ!?」
五年も前のオルタンスの膣洞の感触は覚えてはいないが、現在の締めつけが絶品であることは確かだ。

まるで極上のワインを五年間寝かせてから味わうかのように、その抱き心地のよさに酔い痴れた。

そして、根元まで押し込んだときである。オルタンスは突如乱れた。

「はぁ、あああ……っ!!!」

ビクっ、ビクビクビクビク……。

華奢な両肩から背中にかけてを痙攣させたかと思うと、同時に肉棒を包み込む膣洞もまた激しく痙攣し、吸い上げてくる。

「くっ」

驚いたリュシアンは肉棒に気合いを入れて必死に耐える。

キュッ、キュッ、キュッ……。

(うわっと、いきなり先輩、イっちゃっているよ。せめて、イクとか叫んで欲しかったな。危ない危ない)

不意打ちで来た絶頂痙攣の心地よい締めつけを、なんとかやり過ごすことに成功したリュシアンは、オルタンスの背中を抱いてその耳元で揶揄する。

「先輩、入れただけでイっちゃったんですか?」

「だぁってぇ〜久しぶりだから、気持ちよくてぇ♪」

顔を真っ赤にし、眼鏡の奥の瞳をとろんっと潤ませたオルタンスは、だらしなく緩んだ口元から涎を垂らし、机に小さなオアシスを作ってしまっている。

まさに男に溺れきってしまっている痴女の表情だ。
「まぁ、仕方ないですね。思いっきり楽しんでください。今日はこのままヌカ六ぐらいしてあげますよ」
逸物を抜かずに、女性を六回イかす。その高等テクニックに挑戦してみようなどという気分になったリュシアンは勢いよく腰を叩きつける。
「あっ、あっ、あっ、あんっ……らめん♪　そんなにされたら、わたし、わたし、狂う。狂っちゃう♪」
完全に理性が飛んだオルタンスは、ただ牝欲の赴くままに嬌声を張り上げた。
すっかり出来上がった男と女が、心地よく楽しんでいたときである。
コンコンと、部屋の扉がノックされた。
その音に驚いたオルタンスは、色欲の世界から、現実の世界へと舞い戻る。
「そ、そうでした。こんなことをやっている場合ではありません、閣下の新しい幕僚が来るんです」
「ああ、そういえば、そんなこと言っていましたね」
慌てて男を引き剥がし身支度を整えようと身を起こそうとするオルタンスを、リュシアンは逆に押さえ込んだ。
「なにをっ⁉」
驚く女の両腕を後ろに持ち上げて、室外に声をかける。

「どうぞ」
「えっ、ちょっと……⁉　どういうつもり？」
男の予想外の対応にオルタンスは慌てるが、リュシアンは委細構わず腰を動かした。
「いいじゃん、見せつけてやろうよ。先輩はぼくの女だってことを見せつけておかないと変な虫が付くかもしれないし」
「そ、そんなわたし……」
リュシアンの前では完全な痴女だが、普段の彼女は真面目で仕事のできる女だ。その公人としての仮面を傷つけたくないと必死になって逃れようとするが、後背から男に串刺しにされ、両腕まで固められてはどうにもできない。
部屋の主の許可が出たのだ。当然ながら、扉が開いた。
「失礼します」
リュシアンは部屋の入口に背を向けていたので、砂漠の映る窓ガラスを鏡代わりに、入室者の様子を窺う。
まずは躑躅（つつじ）色の軍服を纏った女が、肩で風を切りながら入室してきた。
年の頃は二十代前半といったところか。女にしてはすらりと背が高く、黄金色の髪を後頭部できっちりと結い上げ、ベレー帽で留めている。
細面の顔で、すっと通った鼻筋に、薄い唇。全体的に肉感が少ないが、それはナイフのようにシャープな印象を与える。

肢体にしても、鞭のようにしなやかで、見るからにできる女であることを全身から醸し出していた。
腰にはサーベルを吊るしていて、まさにどっから見ても女軍人タイプだ。
ついで入ってきたのは、さらに背が高い大柄な女だ。二十代の半ばといったところで、青いビキニ鎧を纏っている。露出の激しい鎧を纏うだけあってスタイルに自信があるのだろう。がっちりとした肩幅に、双乳も大きい。それでいて腹部は引き締まっている。筋肉と脂肪のバランスが程よく取れていた。典型的な女武人といったところだろう。
ただ髪型はかなり奇抜だ。青い豊かな髪が筒状の髪飾りで包まれてツインテールになっている。前髪も右目にかかり、黄色い左目だけを露出させている。
いわゆるバサラといった風体だろう。
もっとも、これはそれほど珍しいことではない。
戦場で活躍する勇士は、自らの武功を誇示するために目立つ格好をするものだ。
まずは先頭切って入ってきた躑躅色の軍服の女が、踵を鳴らして足を揃えると、背筋を伸ばして、模範的な敬礼した。
「本日よりリュシアン閣下の戦目付（いくさめつけ）を拝命しましたクリスティーナです」
キンキンと響く甲高い声だ。しかし、その敬礼姿は実に美しい。その非の打ちどころのない姿勢のよさから、彼女の人となりが出ているようだ。
真面目で、頑固一徹。己に厳しく他人にも厳しい。軍人の鑑のような女だ。

はっきり言って、リュシアンの苦手なタイプである。
ついで青いビキニ鎧の大女もまた、机に向かって立つ男の背中に力強く挨拶をした。
「ルキノです」
風貌は奇抜でも、落ち着いた声音だ。悠揚迫らざるといった雰囲気があり、若いが歴戦の勇士と思わせるものがある。
「ああ、ご苦労さん。今ちょっと手が離せないから、そのまま待っていてくれ」
「はっ」
軍隊において上司の命令は絶対である。クリスティーナとルキノと名乗った女たちは、なんら異議を挟まず直立不動で待つ。
その間、室内には不可解な女の嬌声が流れる。
「あっ……、んっ……、いや、やめて……そこダメ、声でちゃう……っ」
オルタンスの姿は、リュシアンの陰になっていたから、クリスティーナとルキノは、その女の囁き声の意味がわからなかったのだろう。
二人は怪訝な顔を浮かべていたが、やがて上司の前にいる者の存在に気付いた。
「……っ!?」
ほぼ同時に、事態を悟ったクリスティーナとルキノは、凝然と眼を瞠(みは)る。
その瞬間の二人の表情は見物だった。
クリスティーナとか名乗ったいかにも気位の高そうなエリート軍人っぽい女は、顔を真

っ赤にして口元から小さな悲鳴を上げた。
ルキノとか名乗った何事にも動じなそうな女武人もまた、顔を赤く染めて、息を呑む。
二人とも若くして、軍の中級指揮官に成り上がった有能な人材たちだ。滅多なことではここまで動じることはないだろう。
「こ、これは……失礼しました」
一時的な自失状態から立ち直った女たちは、慌てて踵を返そうとしたが、リュシアンが留めた。
「あ、いいよ。そのままそのまま。なんだったら彼女の艶姿をよく見てやってよ」
「あん、そんな晒し者にするなんて……酷い」
余裕なリュシアンとは対照的に、オルタンスは涙ながら訴える。
「先輩って、人と壁作るタイプじゃないですか。こうやってエッチな素顔を見せておいたほうが、打ち解けられますよ。それにほら、彼女たちがやってきたら愛液の分泌も、一気によくなりましたよ」
「あん♪　だってぇ～♪」
時として恥辱は女を高める媚薬となるということだろう。特に真面目を売りにしてきたオルタンスのような女にとって、これは悪夢でありながら、淫夢であるようだ。
「さて、本来なら先輩ともっともっと楽しみたいんだけど、幕僚のみなさんをあんまり待たせても悪いから、一気にいくよ」

宣言と同時にリュシアンは、オルタンスの右足を抱え上げ、机の上に乗せた。左足は下ろしたままである。その状態で腰使いを一気にトップスピードにする。

「あ、やめて、そんなに立て続けにイかされたら、わたし……っ!?」

女の身体というのは、左右をアンバランスにしたほうが、脳のバランスが崩れるのか、より乱れる。それを知っているリュシアンは、わざとオルタンスの片足だけを机に上げさせたのだ。

それに膣洞もねじれて新鮮である。

男の腰と女の尻がぶつかりあい、パンパンパンパンと激しい拍手音を立てる。

「ああ、やめて、見られながらなんてダメ、見ないで、お願い見ないでぇ……♪」

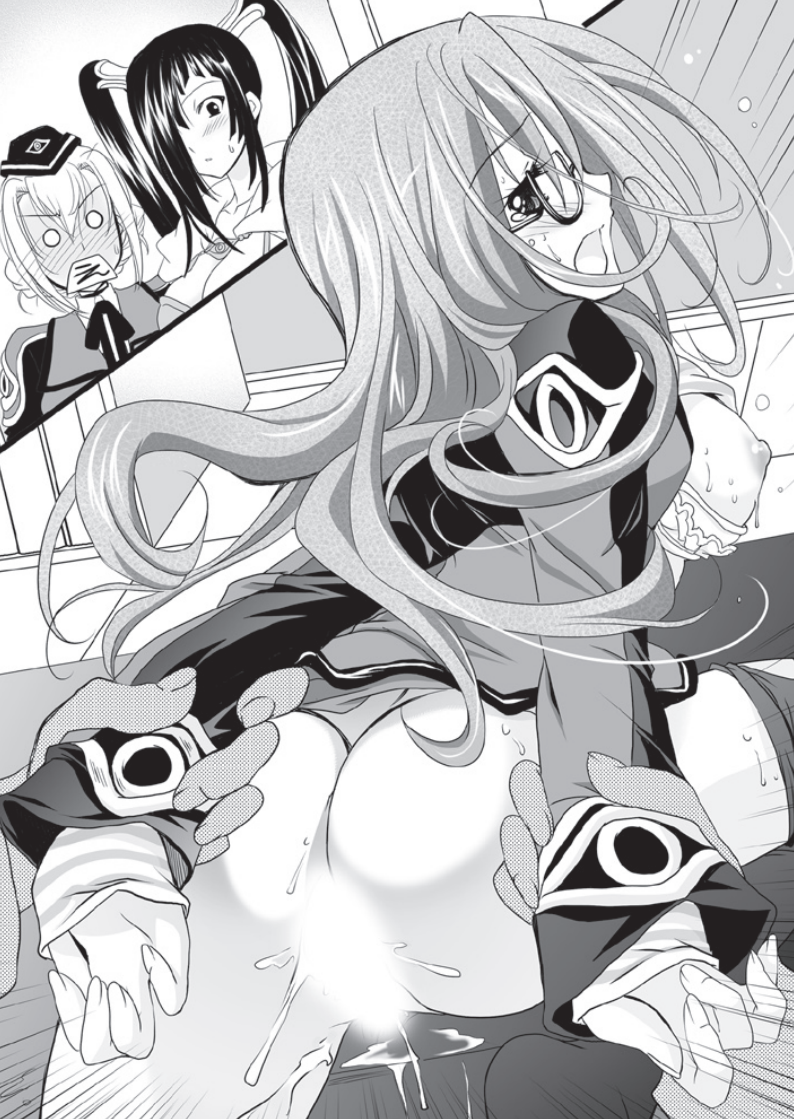
言葉とは裏腹に、その声色は見てと叫んでいるかのように甘く蕩けていた。

被虐の悦びに悶えているオルタンスを組み敷きながら、リュシアンが見学人たちの様子を確認した。

気の強そうなクリスティーナは見てはいけないと言いたげに視線を明後日の方角に逸らしながらも、横目でチラリチラリとこちらを見ている。大柄なルキノは、オルタンスに対する武士の情けというかのように、目を閉じて、じっと耐えているが、意識は目の前の出来事に集中しているようだ。

（あれ、二人とも初心（うぶ）だな。まぁ、若くして栄達しているくらいだし、男なんかにうつつを抜かしている余裕はなかったってことかな。それじゃ、お近づきの挨拶だ。セックスに

興味津々のお二人のために、先輩には派手にイってもらうとしよう）
リュシアンは目の前の獲物へと集中することにした。
「ダメ、そんな激しくされたら、イッちゃう、イクッ、イクッ、イクッ、イッちゃうッ！ひぃ、ああぁ、ダメ、またきたっ！　きちゃったっ!!」
オルタンスは見物人がいることを忘れて、いや、十分に意識しながら牝として堕ちていった。
膣窟がビクンビクンビクンと肉棒を吸い上げてくる。再びの絶頂痙攣。今度のリュシアンは我慢せずに身を任せた。
「それじゃ、イきますよ。くっ」
うめき声を漏らして男は、逸物を思いっきり押し込みながら果てた。
ドクンッ！　どくんっ！　どくんっ！
「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
五年ぶりに精液を注ぎ込まれた女は、牝としての歓びを全身で楽しんだ。
身体中の穴という穴から液体が噴き出したらしい。目からは涙。鼻からは鼻水。口からは涎。膣からは愛液。そして、尿道口からは小水。
シャー……。
「あらあら、漏らしちゃいましたか。そういえば、先輩って昔っからお漏らし癖がありましたよね。いや、違うな。ぼくが尿道口を穿って、お漏らししやすい体質に改造してあげ



たんでしたっけ。先輩ってほんと、ぼくが調教した淫乱体質のままなんですね」
やがてオルタンスの失禁も止まったので、リュシアンは逸物を引き抜くと、身支度を整える。
そして、背後で唖然としている見学者たちに顔を向けた。
「さて、待たせたね。ぼくがリュシアン。このたび将軍を拝命した。きみたちの上官になったというわけだ」
「……」
幕僚二人はどう答えていいか困ったのだろう。表情を消して敬礼のみを返した。
そんな困惑している部下たちの内心など気にかけず、リュシアンは続ける。
「それでこちらの才媛が副官のオルタンス。事務仕事をお願いする」
才媛と紹介されても、膣内射精されて法悦境に達してしまっている女は、口を半開きにして、涎を垂らしている。その表情は痴女以外には見えない。
しかも、彼女たち二人の視界からは、たった今まで男を咥え込んでいた肉穴が丸晒しである。
「はぁ……はぁ……はぁ……はぐっ！」
脱力し、荒い呼吸をしながら机に突っ伏していた女の陰門が再び開く。そして、ドプッと白い液体が噴き出した。体内に注ぎ込まれた精液が逆流してしまったのだろう。
溢れ返り、内腿を濡らす液量は、よくまぁ、こんなにたくさん注ぎ込まれたもんだ、と

呆れるほどである。
「まったく、先輩ったらほんとだらしないな」
見かねたリュシアンがハンカチで、汚れきった陰唇を拭ってやった。
「ところでさ。幹部に女性しかいないみたいなんだけど、これってぼくに対する配慮？」
「そんなわけあるはずがないでしょ」
恥を晒しつくした観のあるオルタンスは、開き直ったのか、何事もなかったかのように机の上から身を起こすと、ショーツとパンストを上げ、スカートを下ろし、ブラジャーを付け直し、インナーを整え、制服のボタンを留め、眼鏡を調整した。
「単に、この軍が戦力外とみなされているだけです」
「あ、なるほど」
総大将ダングラールもちゃんと見ているらしい。
リュシアンの直属部隊は、あくまでも飾りとして扱い、後方で督戦していろということだ。
「では、改めて紹介します。こちらクリスティーナは、戦目付。国王陛下の親衛隊に所属しており、いわば出向扱いです。文武両道に優れ、将来を嘱望される逸材。俊才で知られた方です。彼女には軍師役をお願いすることになると思います」
「へぇ、凄いね」
見るからに利かん気な美人を横目に見ながらリュシアンは軽く流す。

自らの豊満な乳房を両手で持ち上げたマージョリーは、両の乳首を交互に口に含み、乳首を勃起させてみせた。
その光景に、リュシアンは生唾を飲む。
「やっぱり持つべきものは、話のわかる淫乱な恋人ですよね」
「うふふ、ありがと♪」
片目をつぶって応じたマージョリーは、リュシアンの股の間にうつ伏せになると元気よく佇立している逸物を、自らの双乳の間に挟み込む。
モミ、モミモミ……。
柔らかくふわふわとした極上の弾力の中に、逸物は閉じ込められた。
「あぁ、やっぱりマージョリーさんって最高だなぁ」
「うふふ、そう素直に喜んでもらえるといっぱいサービスしたくなっちゃうわ」
チラリと上目遣いで見上げてきたマージョリーは、乳房を内側に向けて、二つのコリコリとした乳首で、左右に張った亀頭部のエラの裏側を刺激してきた。
さらには舌を伸ばすと、乳房の狭間から飛び出した赤黒い亀頭部の先端、尿道口を舐め穿ってきた。
チュプチュパチュパ……。
「うおおおお……」
淫乱熟女のテクニックに、思わずリュシアンは感嘆の声を上げてしまう。

双乳を使って奉仕しているマージョリーのお尻が高く揚げられて、切なげにクナクナと左右に動きだしたのはもちろん、ベッドの傍らから見守るオルタンスとルキノも切なげに腰を振るい始めた。

（さて、二人はどこまで我慢できるかな？）

彼女たちの身体を淫乱体質に育て上げたのは自分だ。それだけにいつまでも指を咥えて見ていられるような性格ではないことはよく知っている。

「マージョリーさん、お尻、こっちにちょうだい」

リュシアンの声に従って、パイズリフェラ中のマージョリーは、身体を反転。男の顔を跨がってきた。

その紫色のゆったりとしたズボンを脱がせば、中からはシンプルだがセクシーな赤紫色のショーツがあらわとなる。

それも引きずり下ろすと、ぬらっと透明な液が糸を引いた。

「うわ、これは酷い。大洪水ですね。砂漠の国である我が祖国で、こんな水の浪費は許されません」

でっかい肉桃を両手で押さえ込んだリュシアンは、肉割れへとむしゃぶりついた。

「あああ……」

いわゆる女上位のシックスナインの体勢だが、マージョリーは未だに双乳の狭間に、肉幹をしっかりと包んでいる。

「ああ、凄い、舌長い。そんな奥まで、ああ、奥まで舐められたら、ああ♪」
膣穴をグリグリと穿るように舐められたマージョリーは、フェラチオどころではなくなってしまった。顎を上げて嬌声を張り上げる。しかし、パイズリはやめない。
「あああああん♪　イイ、イイわぁぁぁぁぁ!!!」
プルプルプルプルとデカ尻が痙攣し、彼女がイったことを確認したリュシアンは顔を離す。
「もうイっちゃうなんて、マージョリーさん。もしかして、溜まっていました？」
「はぁ、はぁ、そりゃ、溜まっていたわよ。男がいないならいないで問題ないんだけど、男がいるのに会えないというのは辛いわよ。遠距離恋愛の辛さを初めて実感したわ」
「そうなんだ。ぼくもマージョリーさんと会えなくて寂しかったよ。それじゃ、そろそろ入れてよ」
リュシアンの提案に、赤紫色の髪を掻き上げながらマージョリーは身を起こす。
「まったく、やっぱり前戯だけじゃ我慢できないのね」
呆れたという態度を演じながらも、リュシアンのほうに顔を向けて腰に跨がったマージョリーは、いきり立つ肉棒を、自らの陰唇へと添えた。
そこにオルタンスが待ったをかける。
「お待ちください。リュシアン閣下は絶対安静だと医者に言われているんですよ」
膝を開き、今まさに逸物を挿入しようとした体勢で止まったマージョリーは苦笑を浮か

べる。
「そんなの人によりけりさ。あんたたちもこの坊やのおちんちんの奴隷しているなら、知っているだろ。この坊やの薬は女に勝るものはないよ」
「そうそう、ここでお預け食らったら、それこそ病気になっちゃうよ」
リュシアンの言葉に頷いたマージョリーは艶やかに笑う。
「それじゃ、頂きます♪」
「どうぞ召し上がれ♪」
ゆっくりと腰を落とされ、いきり立つ逸物が、熟れた女体へと呑み込まれていく。
むぷ、ズプズプズプ……。
「くぅ……」
久しく忘れていた三十路女の犯し心地にリュシアンは身悶えた。
「ああ、いい、このゴツゴツした感じ、一度食ったら忘れられない。まさに女殺しの逸品ね。あん、気持ちいい。これ、これが欲しかったわぁ」
顔を紅潮させたマージョリーは、自ら乳房を揉みしだきながら、豪快に腰を振るい始めた。
「あ、いい、いいわ。勝ち戦の後にするセックスがこんなに気持ちいいものだなんて知らなかった」
淫乱熟女の鬼腰に、観客たちは目が点になっていたが、やがてルキノが陥落した。

「閣下、わたしも参加したいのですが……」
「うわ、他人のセックス見て我慢できなくなるなんて、ルキノのエッチ♪」
リュシアンに揶揄された女勇者は、赤面してモジモジする。
「申し訳ありません」
身体のほうはすっかり淫乱女なのに、心のほうはまだまだ純真な部分が残っているようだ。
「謝る必要はないよ。褒めたんだから。ぼくはエッチな女性が大好きだっていつも言っているでしょ。我慢できなくなったのなら、裸になってこっちに来て」
リュシアンにあっさりと許可されたルキノは、嬉々としてビキニ鎧を脱ぎ捨ててベッドに乗ってきた。
その光景にオルタンスが呆れる。
「もう、ルキノまで。でもまぁ、所詮は、リュシアンくんだもんね」
微妙に引っかかる納得の仕方をしたオルタンスもまた、官服を脱いでベッドに乗ってきた。
四つん這いになり左右から顔を近づけてきた二人は、年上女の愛液でドロドロになっている男顔に接吻をする。
ルキノの舌とオルタンスの舌が、交互にリュシアンの唇を舐めた。
それだけでは飽き足らず、舌を入れてくる。

リュシアンが舌を出してやると、二匹の牝猫は交互に咥えて、ピチャピチャと舐めしゃぶった。
「あん」
「ふぅん……」
マージョリーの豪快な鬼腰を楽しみながら、ルキノとオルタンスとの接吻を楽しんだリュシアンは、さらに両手を伸ばして、彼女たちの乳房を揉んだ。
どちらもよく育っているが、オルタンスのほうが年上だけあってよく育ち、ルキノのほうが筋肉質の分、硬い。
どちらが上というわけではなく、その違いを堪能する。
女たちの乳首はたちまちのうちに勃起して、そこを弄り倒されたルキノとオルタンスは、接吻しながらも、色っぽく鼻を鳴らす。
そして、我慢の限界を超えたのか、接吻を中断して大きく喘いだ。
「あぁ、もうわたしの身体って、なんでリュシアンくんの指に弱いのかしら。ちょっと乳首弄られただけでイきそうになっちゃう」
悔しそうなオルタンスとは逆に、ルキノは恍惚と答える。
「わたしは閣下にこうやって愛でていただけると、凄い幸せです」
そんな可愛い女たちの髪を、リュシアンは軽く撫でてやる。
「ルキノ、オルタンス。悪いけどぼくに代わってマージョリー姐さんの乳首を吸ってあげ

て♪」
二人は思い出したかのように、チラリとマージョリーに視線を向けた。
「ああ、いい。このおちんちん、気持ちいい♪」
マージョリーはすっかり自分の世界に浸って、鬼のように腰を前後に振るっていた。
男女の結合部からは愛液がドクンドクンと溢れて、肉幹は当然として、肉袋、さらには肛門まで滴ってくる。
「あ、はい。お手伝いします」
戦場で命令を受けたときのようにルキノはキビキビとした態度で、マージョリーの右の乳房に吸いつく。
「まったく、亡命将軍なんて、難しい立ち位置の女までしっかり調教しちゃって……ほんと見境ないんだから」
文句を言いながらもオルタンスは、マージョリーの左の乳首を手にとって、その頂に吸いつく。
「あ、そんな⁉　同時に左右の乳首を吸われるなんて、ああ、気持ちいいいいい♪」
極悪テクニックを持つ熟女も、乱交体験はないらしく、戸惑った表情をしていたが、両腕を伸ばして、自らの乳首に吸いつく女たちの頭を抱く。
一方で、乳首を吸いながらも、立ち膝ついたオルタンスとルキノは、仰向けで寝ているリュシアンの顔に向かって、その熟れた桃尻と、引き締まった桃尻を差し出して、クナク

ナと左右に動かしていた。
内腿はぬらぬらと濡れ輝いている。早く弄ってという無言のアピールであろう。
（まったくしょうがない淫乱女たちだなぁ）
苦笑を浮かべたリュシアンは、彼女たちのお望み通り、両手を伸ばす。
右手でオルタンス、左手でルキノの陰唇を捕らえた。
両穴ともに、いつでも挿入できると言わんばかりに、トロトロに濡れている。
（でも、二人の予想通りのことをしても面白くないか）
濡れた陰唇の肉底を、焦らすように撫で回したリュシアンは、中指を女たちの肛門に添えた。
そして、ブスッと押し込む。
「ひぃ！」
「あが！」
驚愕する女たちの蜜壺には、親指を入れる。そして、中指と親指の腹で、狭間の肉壁を抓んだ。
モミモミ……。
肉壁を前後から揉まれたルキノとオルタンスは、尻から太腿、背中をプルプルと震わせた。
しかし、健気にも吸いつく乳首からは口を離そうとはしない。それどころか、責め苦か

ら逃れるためか、必死に乳首を吸っているようだ。
「ああ、そんな、強く吸われたら。ああ、母乳出そう……出ないけど出そう♪」
そんなランチキ騒ぎの室内にさらなる人影がやってきた。
「うふ、うふふふ……こっちは国王陛下に提出する書類の作成で大変だというのに、本来ならあなたの仕事まで押しつけられて、死ぬほど忙しい。それなのにあなたときたらちょっと目を離すとすぐにこれですかっ⁉」
部屋の入口に立ち怒りに震えていたのは、躑躅色の軍服に、ベレー帽を被った戦目付である。
「そんなストレスが溜まっているなら、クリスティーナも息抜きしない」
リュシアンの軽口に、怒れる女は即決した。
「はい。参加させていただきます」
その場で服を脱ぎだしたクリスティーナの姿に、リュシアンは驚く。
「今日はやけに素直だね」
「わたしはあなたに無理やり女にされたんですよ。あなたにだけは遠慮させられる謂れはありません」
軽やかにベッドに乗ってきたクリスティーナは、療養中の男の顔面に自ら座ってきた。
「うっぷ」
「あああ、憎らしい男に、汚いオマ〇コ押しつけていると思うと、気分がすっとするわ♪」

第五章　毒杯

即物的な肉交に慣れていたクリスティーナは、驚きの声を上げる。
リュシアンは尖らせた舌先で、肉船の底を丁寧に浚う。
淫核が突起し、包皮が剥けていく。
その剥き出しの肉芽を口に含み、舌先で捏ね回しながら両手を伸ばしたリュシアンは、クリスティーナの両乳を揉みしだいた。
「あ、ああ、気持ち、気持ちいい、いい……。溶ける。オマ〇コから溶けそう……」
ベッドの上で蛙のように足を広げたクリスティーナは恍惚とした表情で天井を見上げている。
「喘ぎ声を我慢しないで、周りの兵士たちに思いっきり聞かせてやろう。クリスティーナはぼくの子供を産むんだってね」
「あ、はい……き、気持ちいい。凄く気持ちいい。こんな気持ちいいなんて、ああ♪」
ピチャピチャピチャピチャ……。
濃厚なクンニを受けたクリスティーナは、涎を噴きながら背筋を反らした。
「ああ、イクぅぅぅぅぅぅ!!!　……はっ、そんな、そこをまだ舐めるなんて、ああ」
女が絶頂しても関係ない。ただただ無心にクンニを続けた。
そのせいで三度も立て続けにイかされたクリスティーナは、さらに四度目をされそうになったところで、青息吐息で訴える。
「こんなに、濃厚な前戯ばかりされては身体が持ちません。早く、おちんちんをください。

熱い精液を注いでください。妊娠させてください」
すでに男根を叩き込まれ、膣内射精される気持ちよさを知ってしまっている女体である。いくらクンニでイかされても満足できないのだ。
クリスティーナに恥も外聞もない懇願の言葉を吐かせたことに満足したリュシアンは、ようやく陰唇から口を離した。
口の周りの愛液を手の甲で拭ってから逸物を構える。
すでに先走りの液を垂らした逸物は、臍近くまで反り返っていた。
そのさまを見上げ、クリスティーナは生唾を飲む。
「早くちょうだい！　おちんちんちょうだい！　その硬くて熱いのをいっぱい！」
すっかり男根の奴隷になってしまった牝の顔だ。
苦笑しながらもリュシアンは、クリスティーナの右太腿に跨がり、左足を抱え上げる。
その状態で、愛液と唾液でドロドロになっている肉壺に、逸物を添えた。
「それじゃ、いれるけど、本当に避妊はしないよ。いいんだね」
「うん、構わない。妊娠させて、閣下の子供を産みたい。お願い、生でビュウビュウお願い。子宮に、子宮に浴びせて！」
「そう……なら、妊娠させてあげる♪」
今まで幾多の女と遊んできたリュシアンだったが、女を本気で妊娠させようとするのは初めての経験だ。さすがに声を若干上擦らせた宣言と同時に、いきり立つ肉棒を女体へと

ゆっくりと飲み込ませた。
「あぁ……大きい！　いつもより大きい！　お腹がいっぱいになる！」
根っからの真面目娘クリスティーナといえども、すでに尿道の果てまで開発されてしまった女体である。感度がいいのは当然として、避妊をせずに、孕む心づもりのセックスというのはやはり精神的な意味で格別な体験なのであろう。
焦らしに焦らされた後、いわゆる「松葉崩し」の体位で、ようやく男根を挿入されたクリスティーナは、背筋を反らして悶絶した。
女の身体というのは左右非対称にすると、よく乱れるものである。その意味で、横臥位というのは、女を乱すには格好の体位の一つである。
その上、リュシアンは腰使いまで工夫した。
ザク、ザク、ザク、ドスッ！　ザク、ザク、ザク、ドスッ！　ザク、ザク、ザク、ドスッ！
いわゆる三浅一深のリズムで叩き込んだのだ。
「あっ、あっ、あっ、あっ……、凄い気持ちいい……ああ、わたし、ああ、変になりそう……、イク、イク、イク――――ッ」
初めての一対一という常識的なセックス。しかも、明朝には死にゆく男に犯されるのだ。さまざな感情が湧き上がり、燃えるな、というほうが不可能なシチュエーションだった。
そういったメンタルの面で乱れている上に、さすがは女遊びをしまくってきた青年の面

目躍如といった極悪テクニックを受けてクリスティーナは乱れに乱れた。
股間から突き刺した逸物が、喉を通り、口から出てくるのではないか、と思えるほどに口を大きく開けて喘ぎ狂った。
（すげぇ、イきっぱなしのマ◯コに搾り取られる）
元々嬖が豊富な蜜壺の中で、逸物が消化されていく。
「あ、びっくん、びっくん、びっくんびっくんしている……⁉　い、イくのですね。わたしの中で、ああ、子宮に直接注がれる。こ、子供ができる」
どんなに我を忘れて乱れていても、女には男根の変化が手に取るようにわかるものらしい。妊娠の予感にクリスティーナは震えた。
しかし、射精の直前に、リュシアンは逸物を引っこ抜く。
「えっ」
熱い液体をドブドブと注ぎ込まれる膣内射精を期待していた牝は、肩すかしを食らって茫然とする。
そして、ギンギンに勃起する濡れ輝いた逸物を見上げながら、口を開く。
「なぜ、やめるの？」
涙目で非難されたリュシアンは、困った顔で頬を掻く。
「いや、やっぱり。死にゆく者が、子供だけ残すってのは卑怯かなっと思って」
「今さら常識人ぶらないでください。あなたは死ぬまで女の敵でいいのです。さぁ、わた

しを、わたしを妊娠、させてください！　早く！」
血相を変えたクリスティーナは、股を開いて腰をカクカクと突き上げてきた。
そんな痴情に狂った牝の嘆願を聞いて、リュシアンは苦笑する。
「でもなぁ、クリスティーナって、ぼくのこと愛している？　ぼくのことを愛しているって大声で叫んでくれたら、妊娠させてあげる」
「……っ⁉」
今さらのことを改めて質問されてクリスティーナは息を飲んだ。それから決然と叫んだ。
「あ、愛しています！　オルタンス殿にも、ルキノ殿にも負けないくらいに愛しています。閣下はわたしの出会った中で最高の男です。だからお願い、妊娠させてください」
「そう、その言葉が聞きたかった。なら今度こそ妊娠させてあげる」
リュシアンは改めて逸物を挿入した。正常位。それも一気に根元まで押し込む。
「はがっ！」
子宮口を押されたクリスティーナは目を剥く。しかし、そんなことは関係なく、リュシアンは、一気にトップスピードで腰を振るった。
三浅一深といったテクニックは何もなく、ただがむしゃらに子宮口を突き回す。
「ひっ！　ひっ！　ひっ！」
絶頂直前で中断していた男根と膣洞は、先ほどよりも激しく吸いあった。
我を忘れた牝は、両手両足を使って必死に牡にしがみつく。

「いくぞぁぁぁぁぁ!!!」
雄叫びとともに亀頭部をぐいっと子宮口に押しつける。そのままぶち抜くかのように突き立てたまま、射精した。
ドビュ！　ドビュ！　ドビュビュビュビュ!!!
「ああ、入る。中に入ってくる。ああ、子宮に熱いものが直接！　あああぁぁぁぁ!?」
魔法の避妊もなく、熱い大量の精液を子宮に向かって流し込まれる。
純粋な意味での、女体の歓びであろう。クリスティーナは法悦の表情を浮かべている。
「はぁ……」
白目を剥き、大口を開けて涎を垂らす。忘我の境地に達した牝獣の全身から力が抜ける。
プシュッ……。
熱い液体を下半身に浴びせられたリュシアンは揶揄の声を出す。
「クリスティーナは、こういう状況でも、イきながらおしっこ漏らすんだねぇ♪」
「あなたが、わたしの身体をそういうふうに調教したんじゃありませんか」
顔を真っ赤にしたクリスティーナは、はにかみながら主張する。
(普段は口うるさくても、いい女なんだよな)
改めて惚れ直したリュシアンは思う存分に射精をし、小さくなった逸物を抜いた。
ぷるっと身悶えたクリスティーナは、慌てて両手で股間をぎゅっと押さえる。おそらく、逆噴射しそうになったのを、無理やり体内に留めたのであろう。

それから、リュシアンの顔を見ながら訴える。
「か、必ず着床させます。……しかし、ちゃんと着床したか、不安です。もう一発。お願いできるでしょうか？」
（か、可愛い……）
クリスティーナのかつてない健気さに、リュシアンの心は鷲掴みにされた。
「それじゃ、すぐにできるようにご奉仕してくれる？」
シーツに腰を下ろしたリュシアンが半萎えの逸物を指し示すと、クリスティーナは積極的に口に咥えてきた。
「う、うむ、ふむ……」
精液と愛液、さらには尿液までかかってしまった逸物であるが、妊娠希望の女は嫌な顔ひとつせずに美味しそうにしゃぶっている。
逸物はたちまち大きくなった。
「ついでだから、おっぱいに挟んでよ♪」
その要望に、クリスティーナは瞬きした。そこでまだ、彼女にパイズリを仕込んでなかったことをリュシアンは思い出す。しかし、痴情に狂っている女はあっさりと頷いた。
「こ、こうですか？」
男の股の間に身を屈めたクリスティーナは、戸惑いながらも自ら両の乳房を持ち上げて、逸物を挟んだ。

プリップリの乳肉の中で、モミモミと男根は揉みしだかれる。
「ああ、いいな。クリスティーナがこんなに素直でいい女だったとは知らなかった」
「くっ……。このような結末になるとわかっていれば、わたしももっとご奉仕したかった」
後悔の涙を浮かべながらクリスティーナはパイズリを行う。
肉棒に付着していた精液と愛液が潤滑油となって、その動きは実にスムーズだ。
ヌチャリヌチャリと卑猥な音がする。
「それじゃ、乳首でエラの部分を擦るようにしてみて」
「わかった。あっ、くっ、乳首が擦れて気持ちいい……」
もうすでに全身が性感帯と言っていいほどに昂っているクリスティーナだ。自らの両の乳首を、男根に擦りつけただけでビクビクと震える。
「そうそう、いい感じ。それから舌を伸ばして、尿道口を舐める」
「わかった。うむ、うむむむ……」
男に命じられるがままにクリスティーナは必死に口を開き、ピンクの舌を伸ばした。そして、唾液の滴る舌先で、ペロペロと必死に舐める。
「それから縫い目を舌先に乗せて、左右に転がす」
普段では考えられないことだが、クリスティーナは実に素直にリュシアンの指示に従った。
「ああいい、いいよ♪」

リュシアンが思わず喘ぎ声を漏らすと、クリスティーナの青い瞳が猫のように輝いた。
「初めてこれを見たときは、なんて卑猥なものかと思ったけど、慣れてみると可愛いものです。いくら雄々しく振る舞っても、所詮は男の急所。次はこんなのはどうでしょう？」
もともと頭がよくて、学習能力のある女だ。たちまち男の急所を見抜き、弄ぶ楽しさに目覚めたようだ。
パイズリをし、なおかつ舌を伸ばし、尿道口を舐め穿ってきた。
「うっ、クリスティーナ、そのままおっぱいのほうも激しく上下させて」
悶える男の懇願を受けて、クリスティーナは双乳をリズミカルに上下させた。乳肉を動かすのは結構な重労働らしく、額から玉の汗が滴り、頬を通り、顎から、胸の谷間へと流れる。
「ああ、クリスティーナのおっぱい最高っ！　……うっ」
すっかり寛いでいたリュシアンの逸物が、不意に爆発した。
ドビュ！　ドビュ！　ドバシャァァァァ!!!
熱い白濁液がクリスティーナの顔に浴びせられる。
自分の努力で男を果てさせた歓びに、女は恍惚としていたが、不意に我に返るや、事態を悟って激怒する。
「に、妊娠させなくてはいけないのに、顔にかけてどうするんですかっ！」
「あ、ごめん。あんまり気持ちよかったから、つい」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

呪詛喰らい師2

［小説：蒼井村正／挿絵：或千せねか］

全国書店で好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を牝奴隷に堕とす新たな敵の登場!

思春期なアダム4 聖域の崩壊

［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で好評発売中

少女天使の暴走が平和な学園生活を破壊する!!

シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

オトミコ！ 僕は男の巫女娘

［小説：大熊狸蓄／挿絵：大空樹］

全国書店で好評発売中

男の子と女の子——

二つの性の間で揺れ動く男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガ!! ①〜③
- ビルグリムメイデン ①〜③
- 不死の吸血鬼がドSのご主人様を募集しているようです
- 思春期なアダム ①〜③
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①〜③
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!